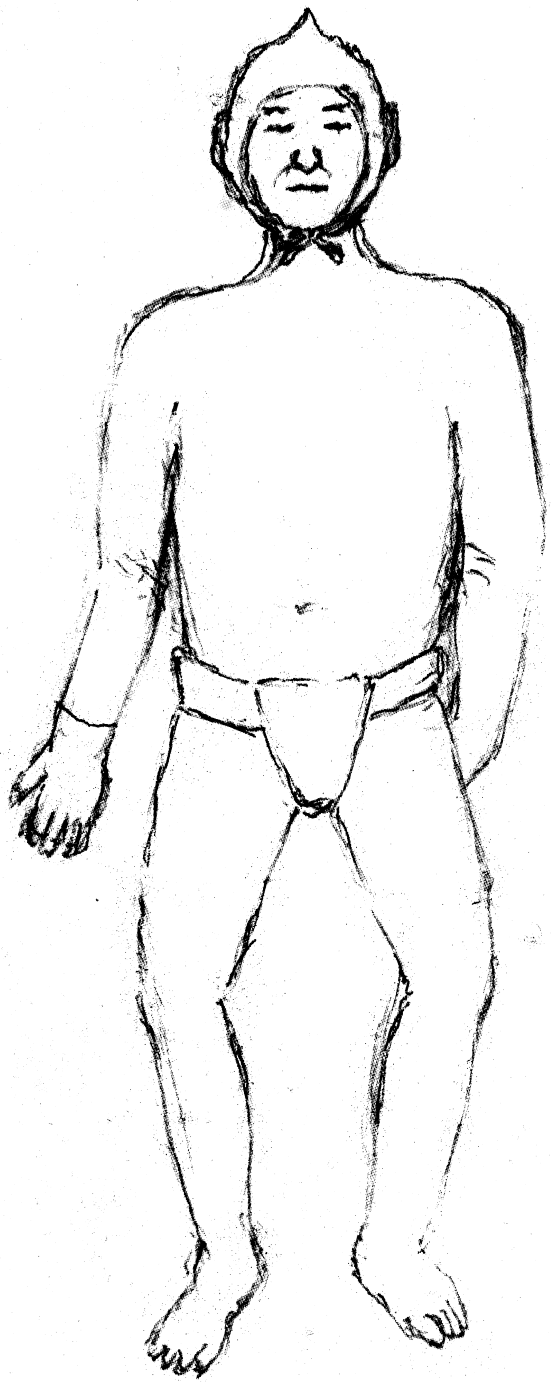


伊島の伝説と海士

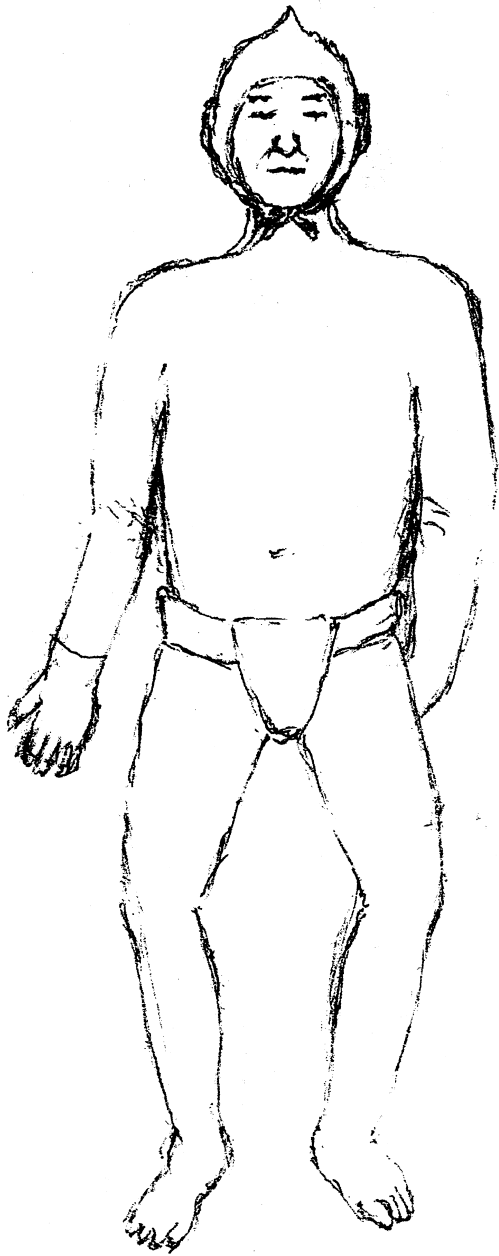


神野林則

伊島の海士(あま)

伊島のアマに對する確実な遺跡の無い事類も無い
 只神社や寺院の奉納物の海士組の名が有る近
 世の物でしか無い。戦国時代に蜂谷領水軍の將と
 して楢泊松鶴城主本村甚五郎衛の部下として
 幾度となく参戦し戦功あり「伊島海士」と「灘メー
 田お構いなり」のお墨附も蜂須崎とすういたが、たと
 云われてゐるが海産物を採りて生活の糧としてゐる
 現在伊島民には不明である

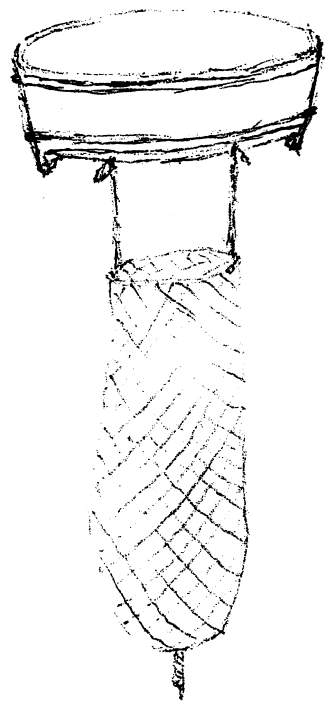
以下は筆者が苦心ついでに取つたアガツの祖母から聞かされ
 小学校高等科卒業後、浅水の道に於て漁業のそ
 用者としてアガツの本格的に採介の法を習得する採
 になつてアガツの祖母に肉の事と浮網に話して呉
 れたその言ひ伝へても言ふがそれを原に残して置
 きた。伊島の海士は水着と浴衣、比呂素の禪で
 白の六尺禪と白米緑の頸巾一回の禪なつてゐた
 してゐた



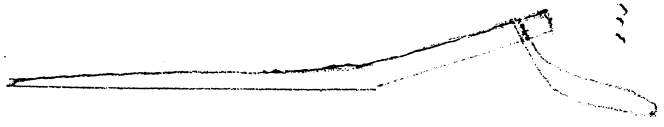
当時は水中メガネが無かつた

當時はメガネが無く水中で眼を困りてぼんやり見える岩や
 海岸を見乍ら岩肌をなぞりて鮫や茶螺床伏などを採つて
 いた潜水の度眼に塩水がしみて痛いのを浮上す度眼が
 鼻がけてたので顔が赤くばつたり自鼻の襷が剥ける事か
 一夏に幾度もあつたそうだがその中、藩主や幕府から鮫や茶
 螺が入田の時下令があれば時期と回分を潜つて必要な量を採捕
 し奉つた。其の為何時でも必要な量が入り出する採ゴレンジヨ波石(三)
 と言ふ波石に止磯として採禁と禁止しなほ海内相き量の鮫を
 放流して居ると云ふ現在も此の磯、波石は献上波石(ゴレンジヨ波石)と
 して残つてゐる其の昔は徒磯(カチン)舟に積りて陸から磯つたみや
 山越をして海に入つて具と採り背負つたり担いで帰つてゐたと
 聞かれてゐる特物は図エの採物品である。

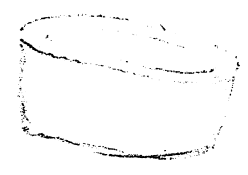
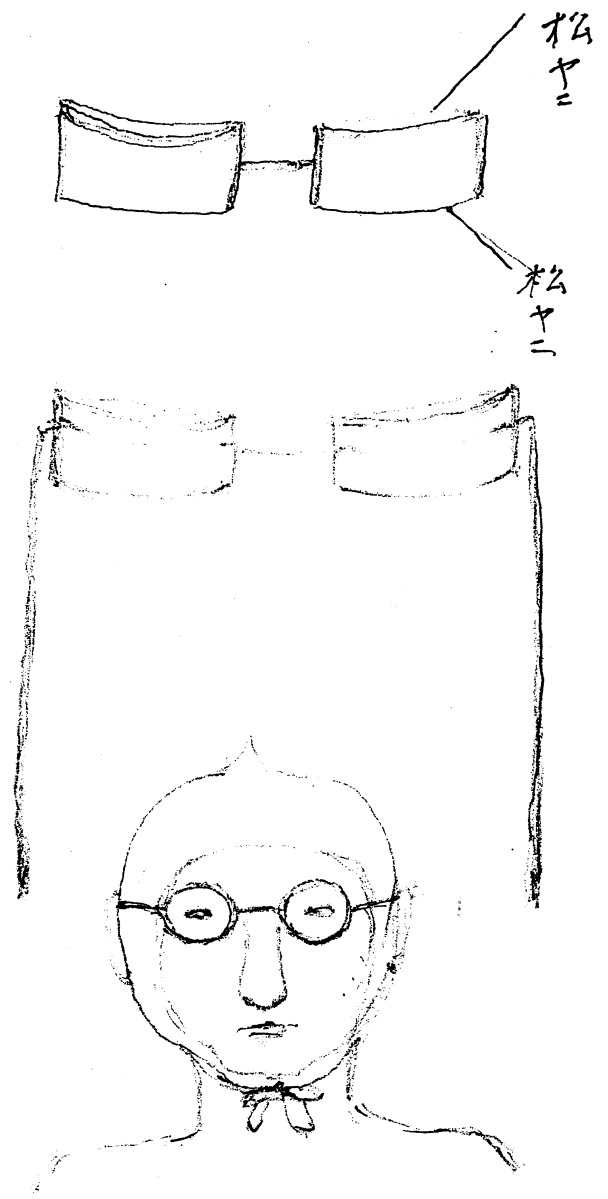
水練丸



アマノミ



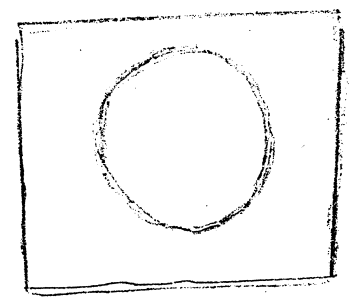
以上の様な操業をして居る時何時も伊島の板ガラスが入つて来た此の品を船大工に頼み檣材の箱を造り底を板ガラスにして海中を見え海底の海草や岩魚が手に取る程に見える。そこで海士に不得手(フエテ)な者や体質上潜水不能な人が船より奥海草、海白洲(チマコ)と採りイサリ漁を始めた此の箱が板ガラスと硝子を得て竹筒を目に合子採に短く圓の様な型物の物を造りガラスを此の型の中に入り採毛等して線と引ま、ヤツトコで不用部分をカキ取り此ガラスを竹筒の中にはめ込み、当時は、山あつた松山の松皮にと外部と内部から詰めて防水し、それ細人の顔と目に合はせ水中眼鏡が出来た。それからは鼻の皮膚層の心配もなく、鼻が長もちしなかつた。



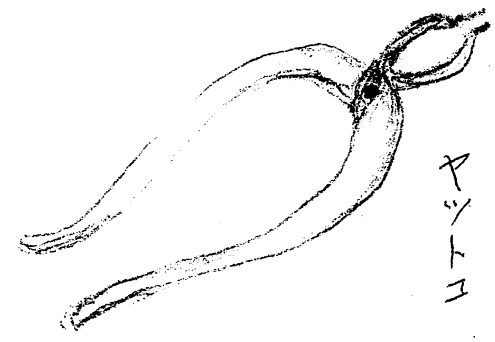
竹筒



ガラス

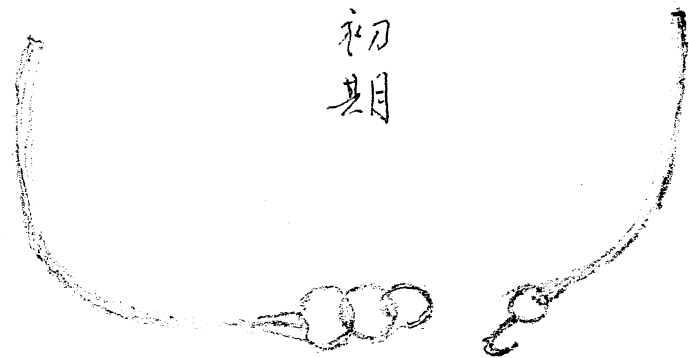
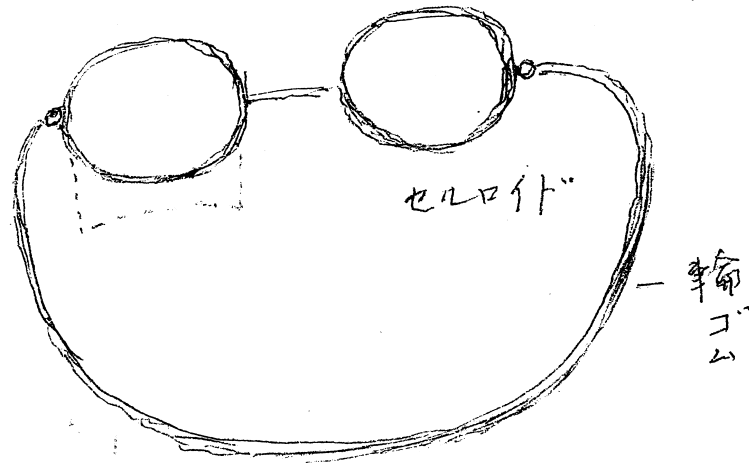
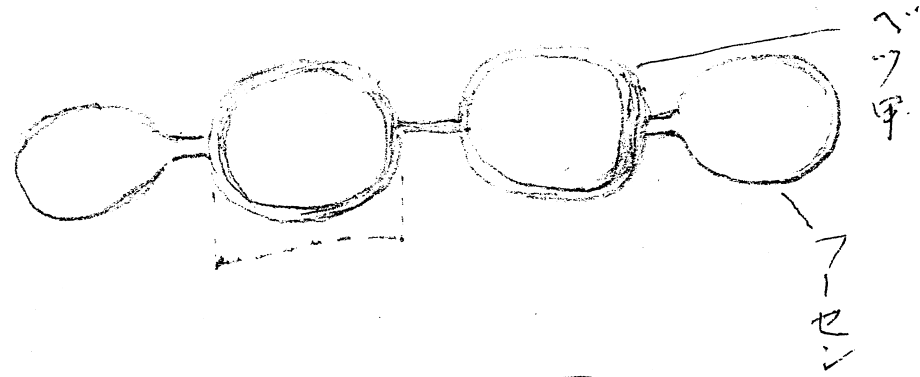


板ガラス



ヤツトコ

竹筒メガネは防水の点と水圧の入り眼が痛くて四五米以上
 潜れなかつたそんな時大正初年の邊の甲で作つたベツコウワ
 又つ眼鏡が重ううおさされたのが高価な上に水圧の關係は改良さ
 れていふおつたそこで考へられたのが特種なフーセンを附けて水
 圧を緩衝する事が可能な浮海へ潜水出来たお視界が狭
 い安価な金屋製の物が出来我々の子供の頃練習用に使つてい
 たが金屋メッキ品の為サビが出てガラスが曇つて見にくくなる
 やがてセルロイド製が出来たが満足出来なかつた

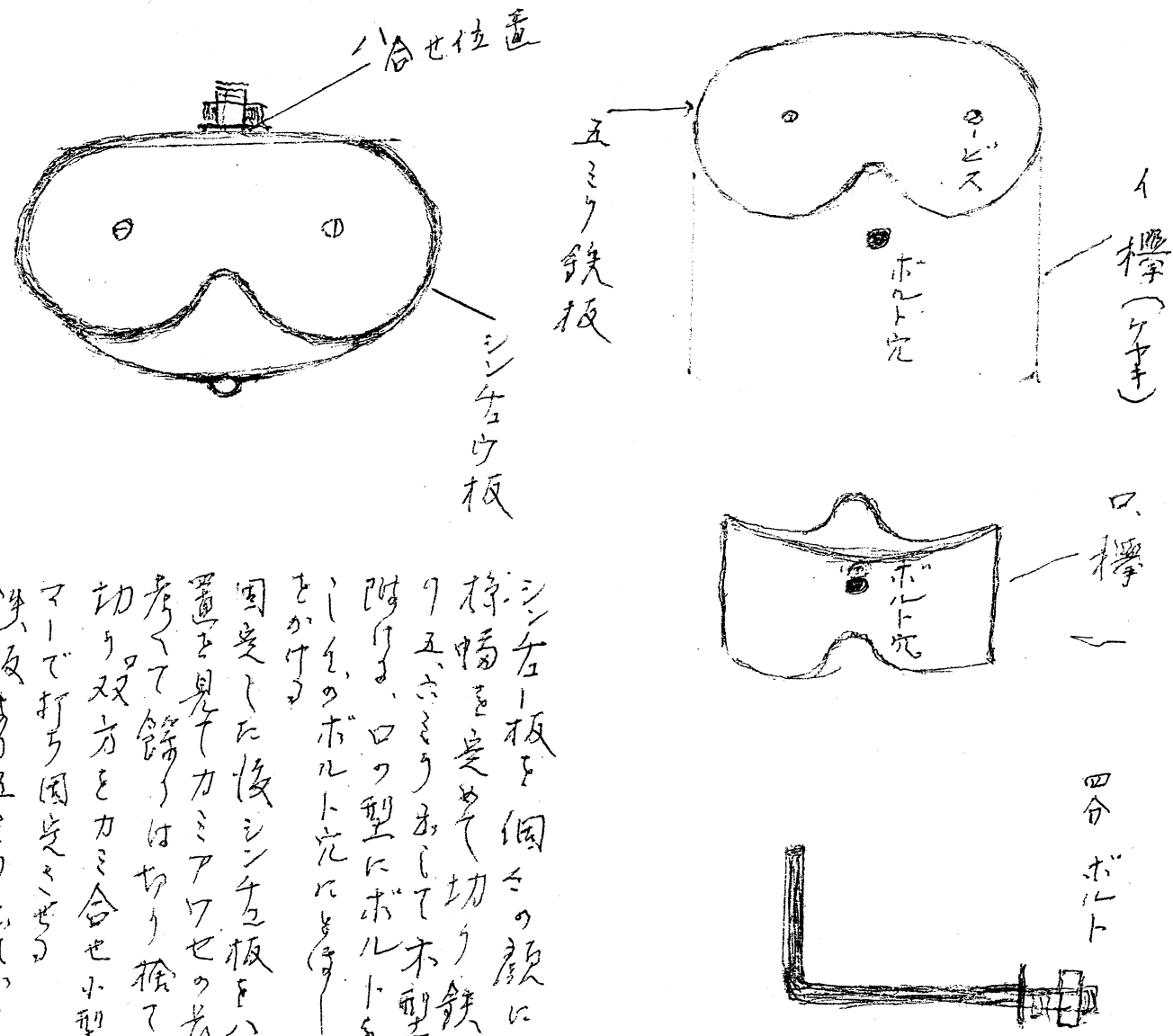


金屋製も型は同じであつた

昭和初期

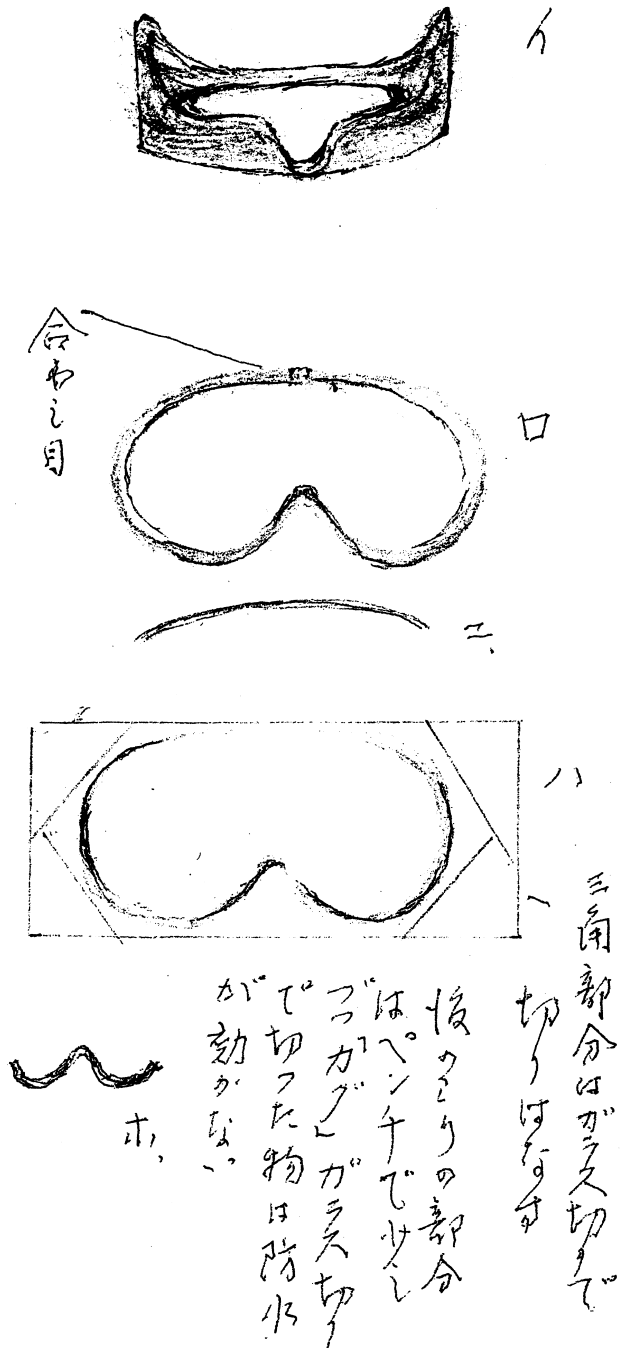
奥の島で考案した自家製製作した潜水用二眼鏡
である

一、本型を造り、大、中、小、三種



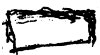
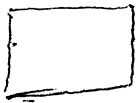
シシウ板を個々の顔に合ふ
枠幅を定めて切り鉄板よ
り五、六ミウおして木型に巻
附ける。口ワ型にボルトを通
し、そのボルト穴にもクランプ
をかける
固装した後シシウ板をハの位
置と見せカミアワセの長さを
考へて餘りは切り捨て
切り双方をカミ合せ小型ハン
マーで打ち固装させる
鉄板より五ミウ出ている部分
を木製ハンマーで内側へ鉄板の
上に水平に成る様カシメル

此れが出来るやう型をはずし、個人の顔に合せて鉄で切り
 外側を磨いて行く鼻の部分と合し目の部分に特に注意
 が必要



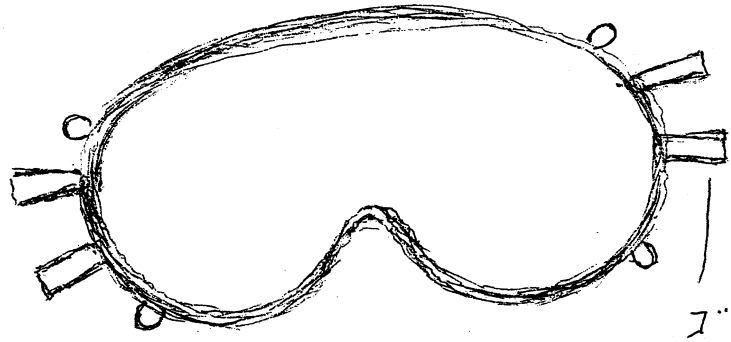
合し目をハンダで止める次にガラスの入り部分(五ミリ)曲げ
 た内側に薄くハンダを流すハのガラスをギザの裏、方と内側
 にして口のハンダを流すハの所を正しくつれて密封させる
 銅線で作るニ、と合し目の部分ハ、ホの線と鼻の
 所に入れる鼻の銅線をハンダで固定する次に鼻
 の部分を固定する
 出来るやう残りの部分ハハンダを小玉にして両側のある
 ところを所々配して「コチ」を充分焼いて仕上げを
 する。切り取る部分で長さニセンチ位のパイプを四ヶ
 造る

板を削げハンダで付ける



此の部分を少し太目にする凡せんが板けり、紙

あかじめ四ヶ所穴を固けて黒色、
 パイプ四本を筒の縁にハンクで附ける
 此のパイプにゴム管をパイプより少し長い目に切り尾に
 込む

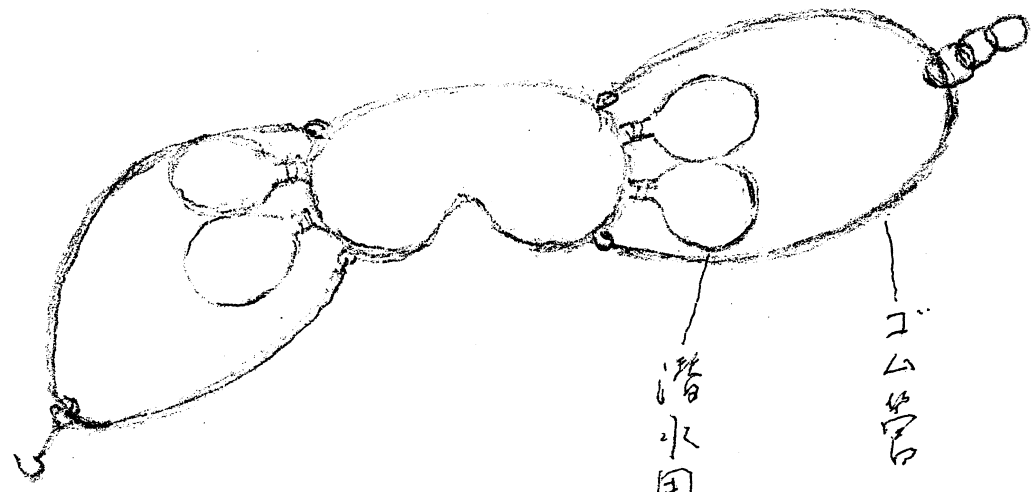


ゴム尾込

此の部分に潜水用特種
 フウセン肉厚を有り付ける
 浅海にもぐる海士はニケ録
 の二本はローソクでつぶす
 柄ばしで止める人もいた

玄束とろ図

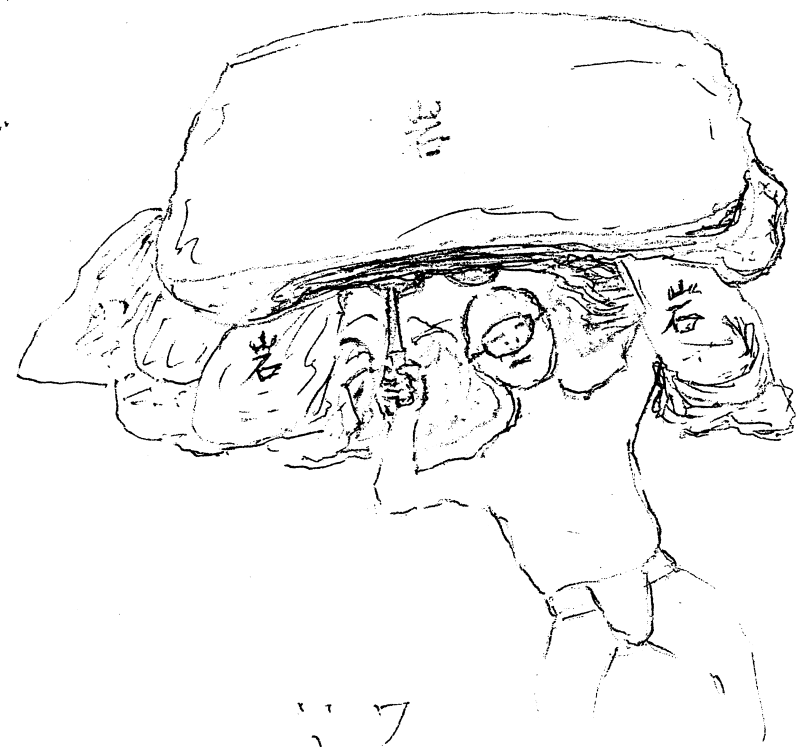
風せんは古いのは黒色で
 あつたが新しい物は白
 解色に近いものになって
 いた太陽熱で焼けたい
 様者「たろびろう」



ゴム管

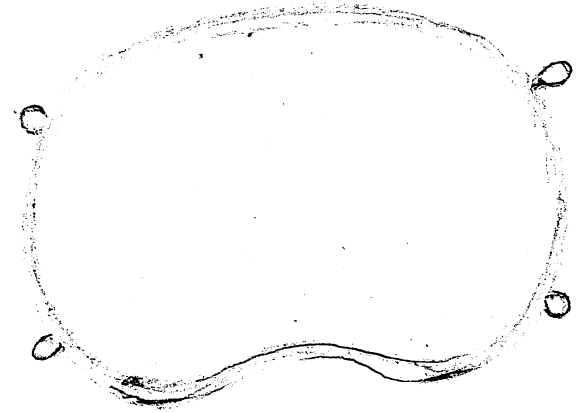
潜水用フウセン

浅海で黒鮫を専用の持捕する人達が大なる岩の
 奥深い天上一部分に潜水して
 下の所で専用の海水が入り眼が見えなくなると云ふ状態
 のわりの「ワン眼鏡」が出来た



ワン眼鏡で動作して
 いる図

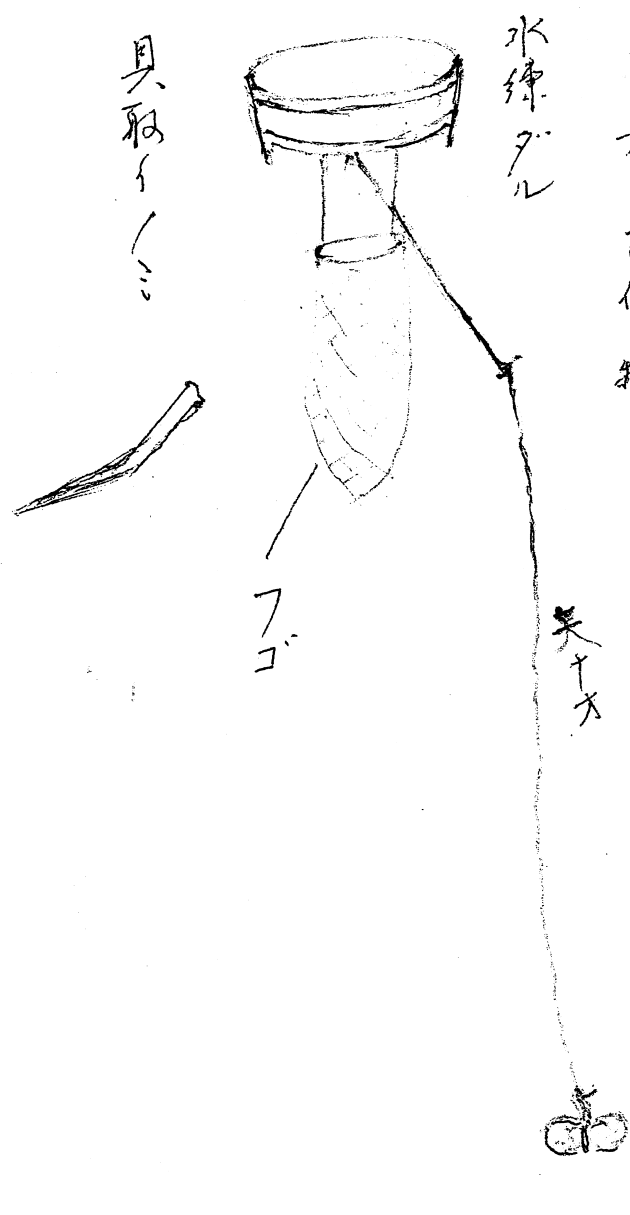
「ワンメガネ」



此の眼鏡が出来た為目元が
 岩や海岸に引掛つたり岩の附
 着物で目元が破れ目元が意
 外な岩の穴や透き向く隙が
 かなり多くなり以前に見えな
 かった物が見易くなり為漁獲が
 増した

此の眼鏡を製作して居たのは伊島々民海士の
 榎義長岸太郎氏その後を承け続いたのが
 岡本清吉氏其の跡を和神野林則が承け製作
 して居たが仕事都合上伊島々民と出稽泊町に居るう
 へ建設関係の潜水作業の重要点を置き建設
 作業の要の時海士の仕事(鮫サガエ、ナマコ、ウニ、天草)等
 時期に依り作業して来たが由、化学製成品のウエラ
 トスーツが出現し現在の眼鏡が自由に安価に入手
 出来る様になり、面倒な物品は造らなくなつた

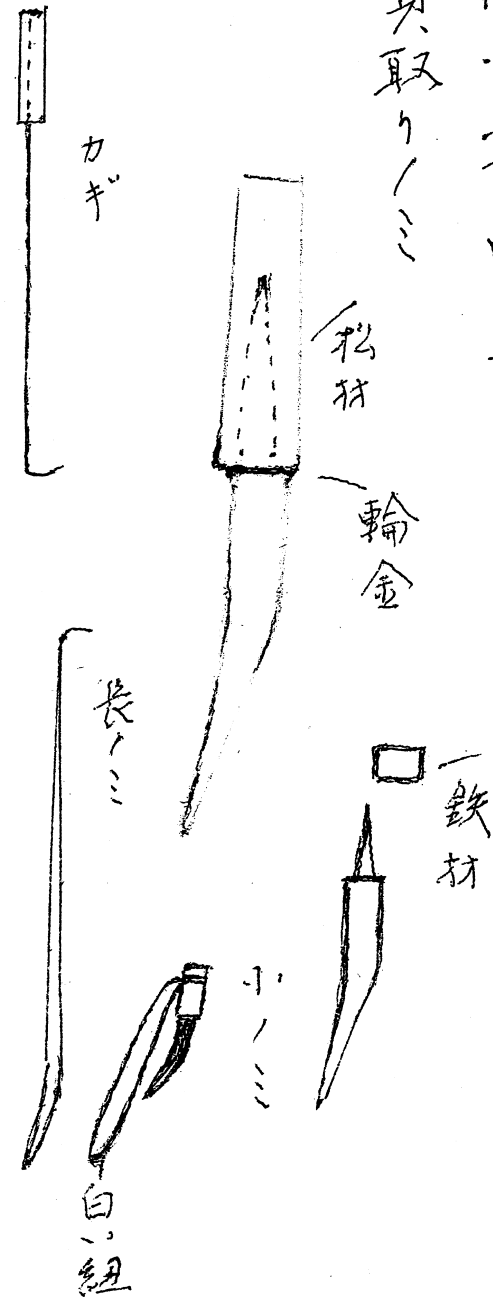
使用々具 古代の物



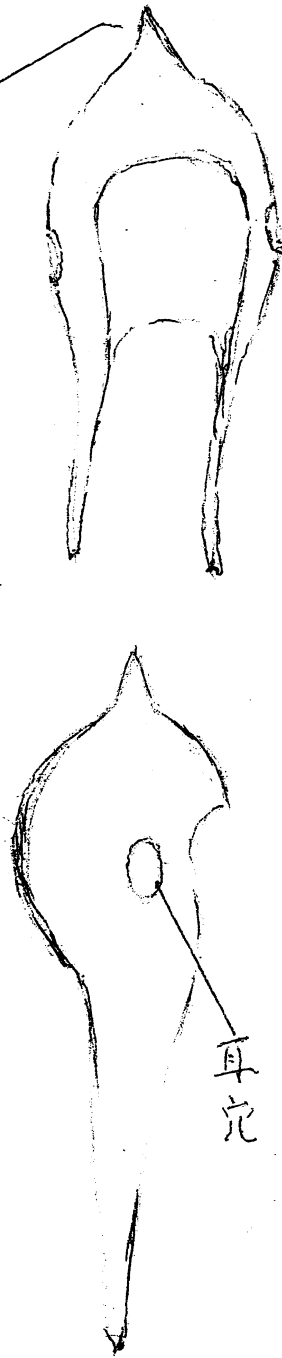
眼鏡がよゝつた昔は半分は手こぐりて確かめて
 獲りつけたかう現在存なノミは使にたつた為
 和舟建造用の舟釘を煉、目鏡が出現して色
 色考くられ時代共に変わって行つたと思ふ

裸で潜水して居た時近年大正昭和の用具
 水練樽は錫スズの蓋フタは竹と使ツいた
 防水輪は金属に蓋フタつた。夫それ外ほかヤフゴの材料
 が化学製品に蓋フタつた。

貝取ノミ

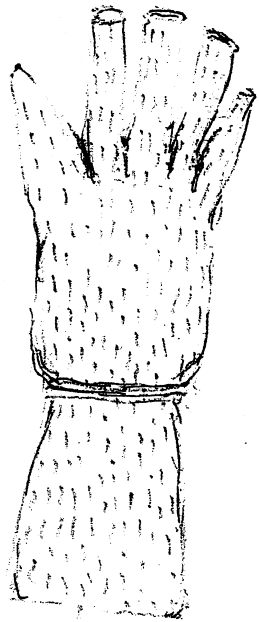


貝取ノミ
 白木綿オビで作つくり手造テいで自家製



頭部カブタの突起はオボレオボレ時海底沈シズんだ時など裸ヌである為
 此こゝの突起を右手で握とり人体を垂直にして引き揚あげ
 げる両足左腕が充分動作出来る長ながい陸りく艇ていからの決けま
 果は生まれと黄わう重じゆうな物ものであらう

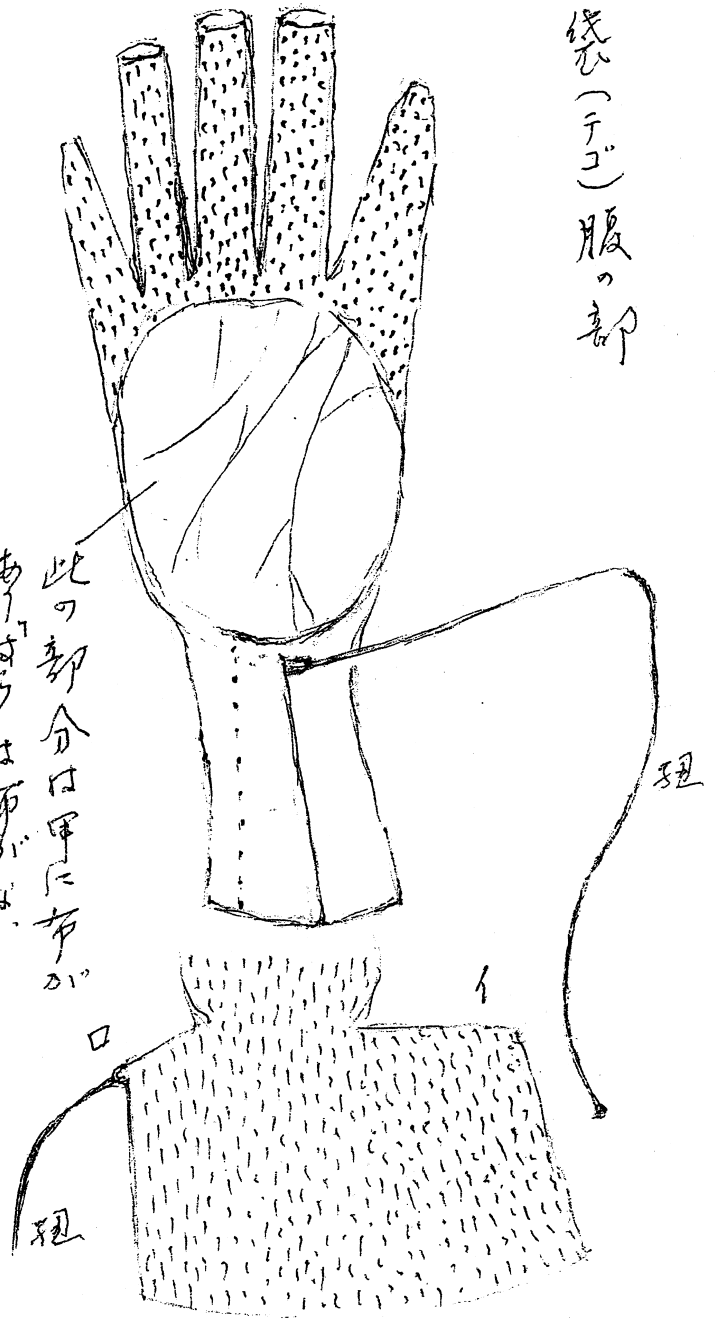
手袋 (テゴ)



木綿オビの布ぬいに糸いとのサシコサシコの様な
 テゴテゴを自家オビでつくつた

平ひらの北きた月つき (甲) の
 部ぶである

手袋(テゴ)服の部

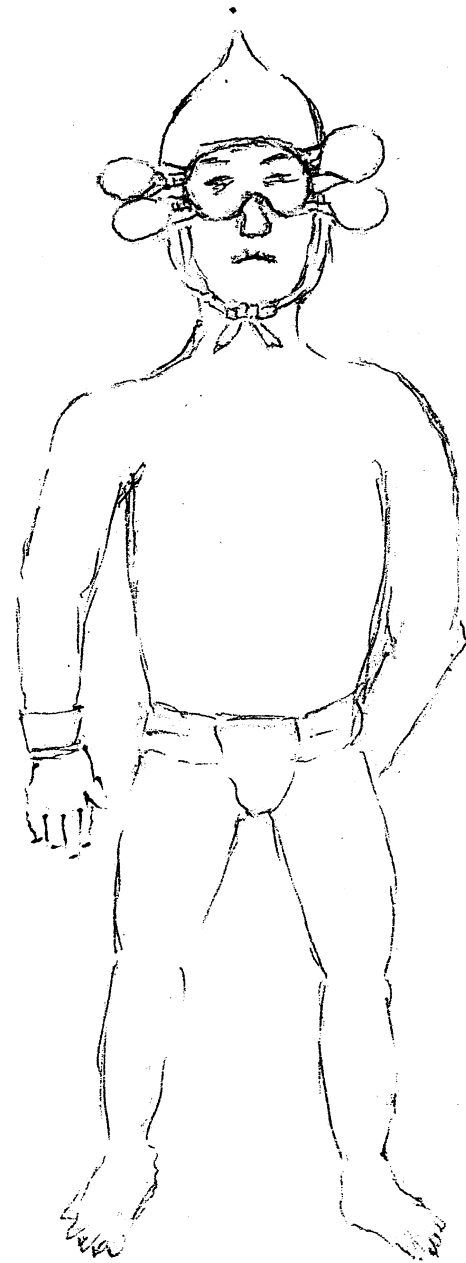


禪(具取りマワシ)

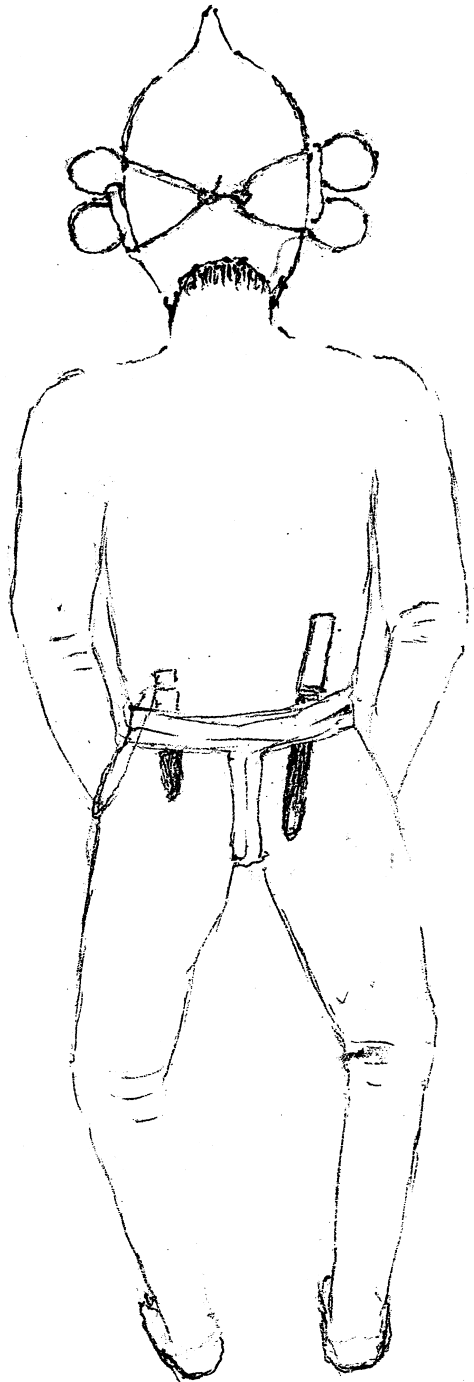
白木線の六尺と云はれ格に仍つてまろくである
一米七十。ニ米位うで赤い物を使用した昔の
人ものたらしい。白木線の効用は海士の最も恐れ
はサメや海亀等であるが之等の者は白く大きい者
を恐れ羽留世が有る事を古人が知つて居てサメ類
が現れた時禪のその袋や巻いて居る部分をはが
して水中で大きくなびかせる其の事によつて顔の白
ズキンと合はせて人体の大きな生き物に見えぬを
彼等去つて行く先人の知恵である
最近テレビでアフリカが南方の島の住民が近くの島
へ泳ぎ渡る時長く太い手製の綱を腰からなび
かせて体を大きく見え泳いで居る映像を見てもな
る程と納得した。

昭和期の海士の姿

前



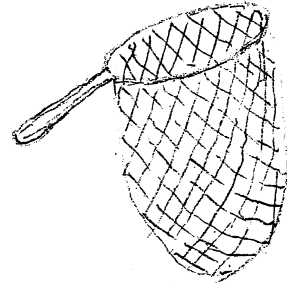
後



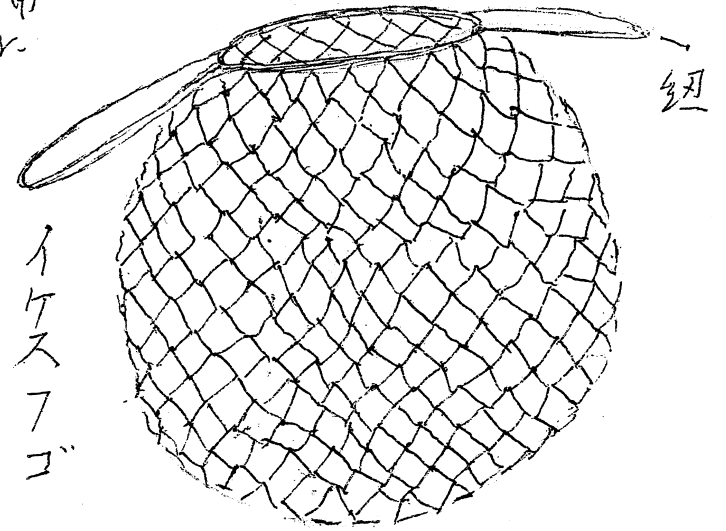
大ノミ、小ノミは図の様
に禪に差して込む

其の地の道具

金玉フゴ



イケスフゴ



主として栄螺(サリエ)採捕に
使われた

天草採りに使ふ人もいた

採捕した鮎を入れて

船の生業に置く

古くは白棕柁糸で作
つていた

魚類をとる用具

ヒツカケ
引搦

杉の柁

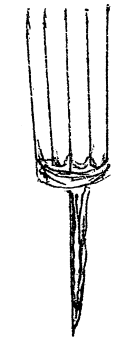
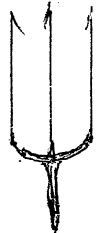
釣針



カナツキ

竹(シブツク)

ゴム

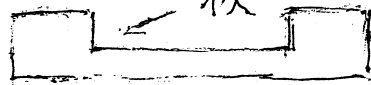


毛ワ



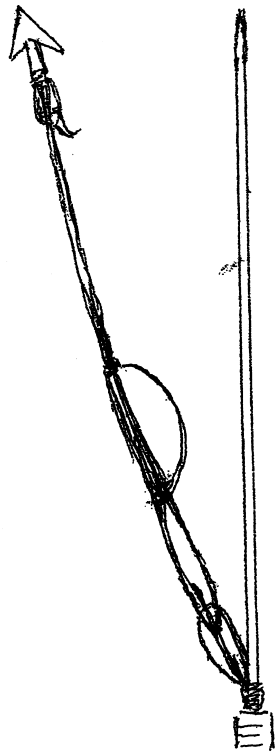
寸板、三寸(9センチ)以下の鮎は採
てはいけぬ(殺の長)

寸板

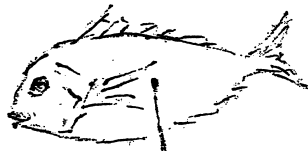


切り込み三寸

金突、毛ワ、共に
ゴムが通る時は
手突である



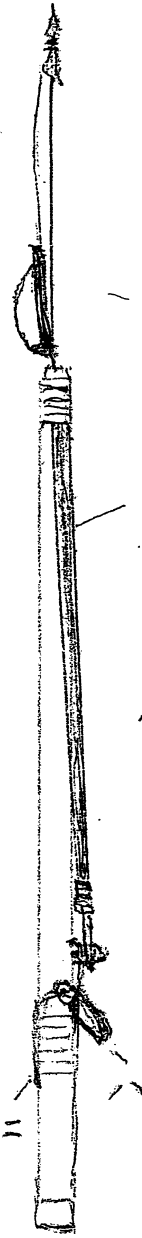
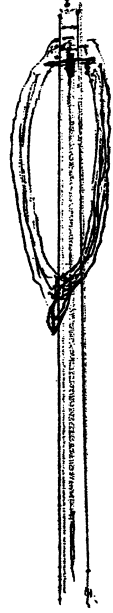
14
 マーゴのモリは私が手製で製作した物である



使用例



モリが入った例



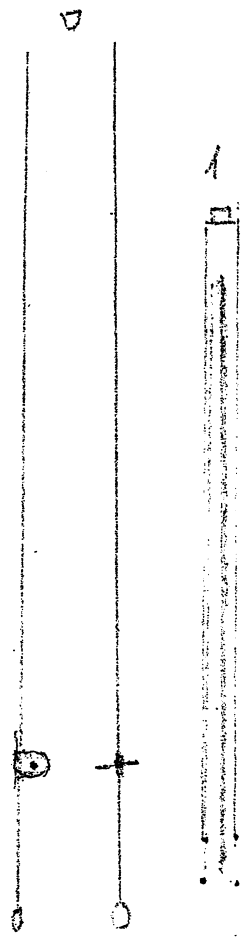
出来上がり完成図

ゴムを張った使用時

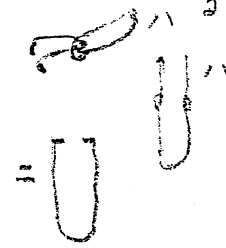


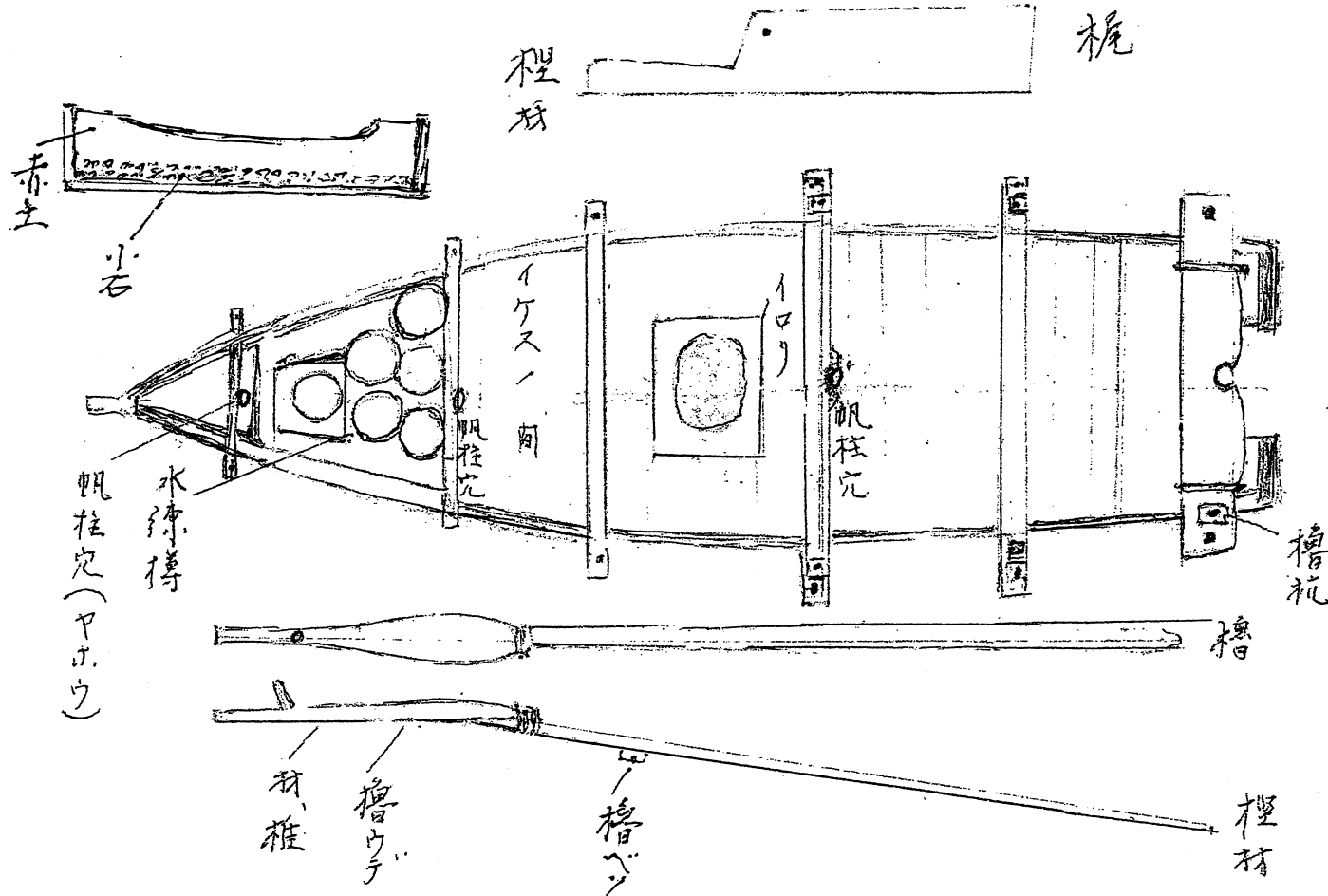
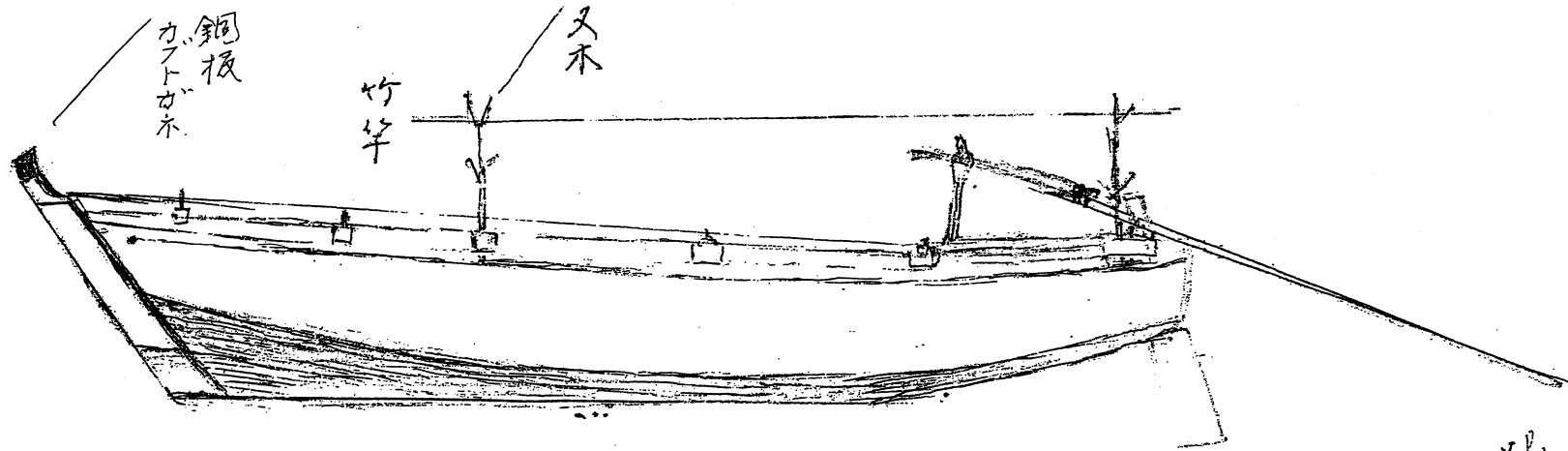
小形モリ

自動車(小型)の車輪ケヨーブ



竹筒の節を抜く箇の竹を満をほり



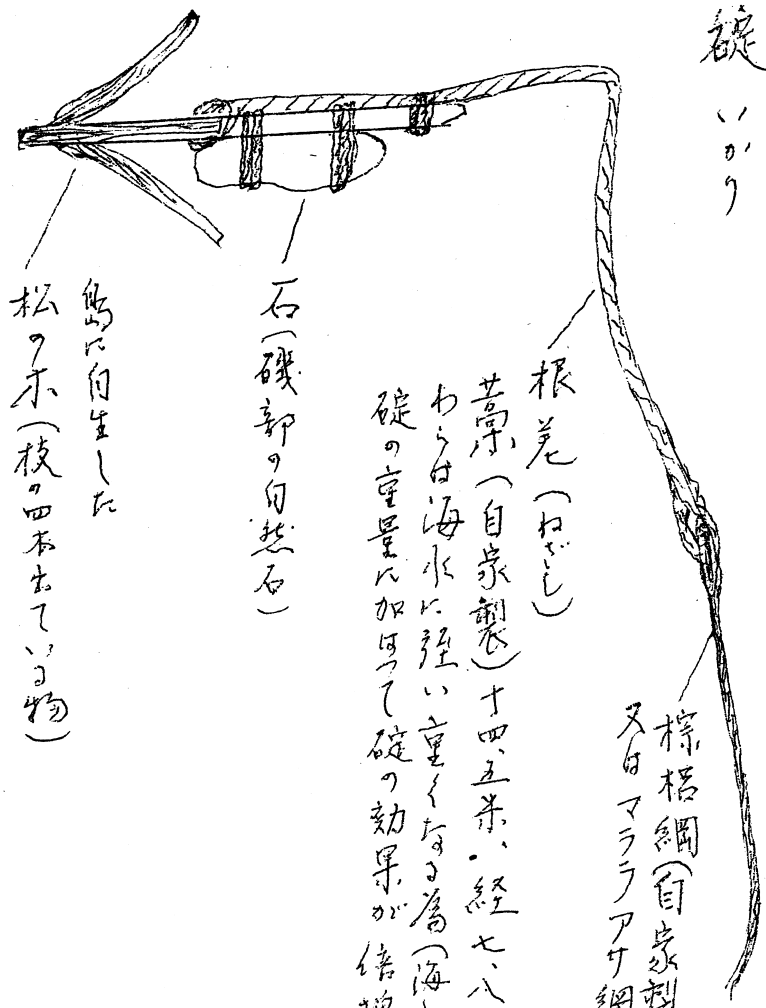


戦前の和船（海士船）

島内の造船所で建造していた竹竿の禰や頭ギン等を引して乗組人はイロリを囲み暖をとって次の入水まで。漁場を移動した一日三四回

漁船に用いた用具

碇
いかり



棕栝網(自糸製)
又白マララアケ網

根差(おとし)

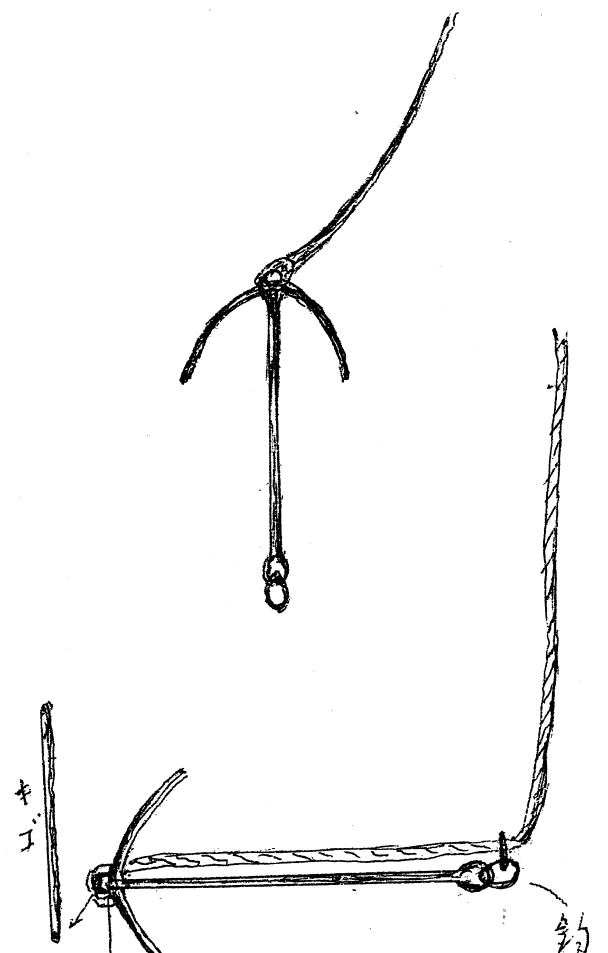
芒原(自糸製)十四五米、径七、八程
わら白海水に強い重くなる為(海水が浸み込む時)
碇の重量に加重して碇の効果が増加する

石(碇部ノ自然石)

鳥に自生した

松ノ木(枝の四本出ている物)

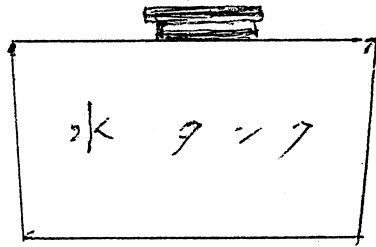
海士の採草場所は荒磯の場合がほとんどで、よく碇が海底の岩にひかつかう取れなくなる。その時船上から強かに引いた場合かつかう枝が折れて碇や綱を捨てる事がある。



鉤(くわん)

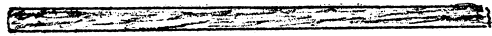
鉄製の碇の場合、キゴを
尾に頭部分に根差
綱を付し着け、鉤(くわん)
に紐を付けて碇に掛けて
取れなくなると時舟上
から強かに引いた時、此の紐が
切れて上巻の様になる。

此の部分(ウバノ相)の
キゴを尾に付す。

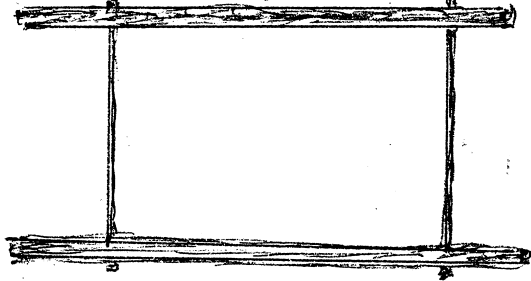


氷タンク

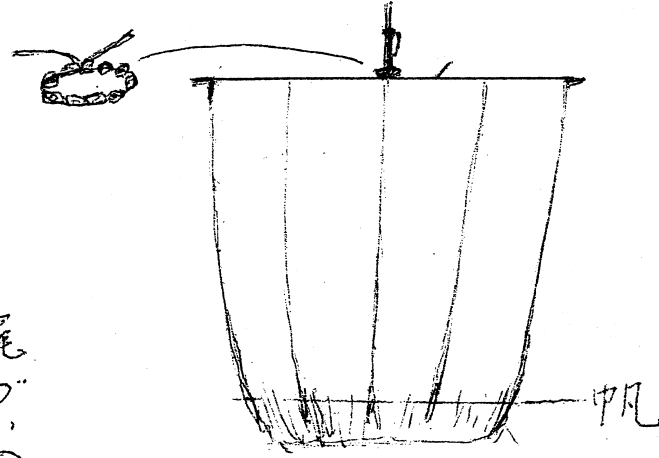
一本シユラ(シラ)



ワクシユラ(シラ)



漁舟の陸上の
場合使用島の
に自生する藪
クホ(モチ)草
くてのたいて
べり易い



帆

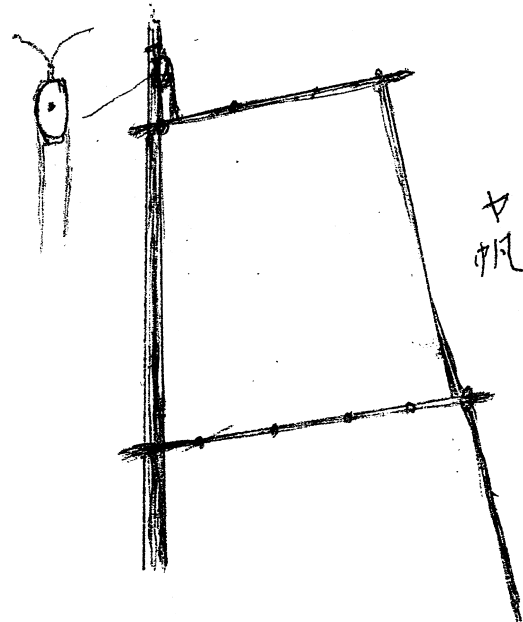
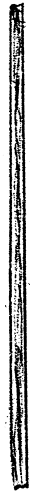
梶づか(カズカイ)ウバメ杓



帆柱

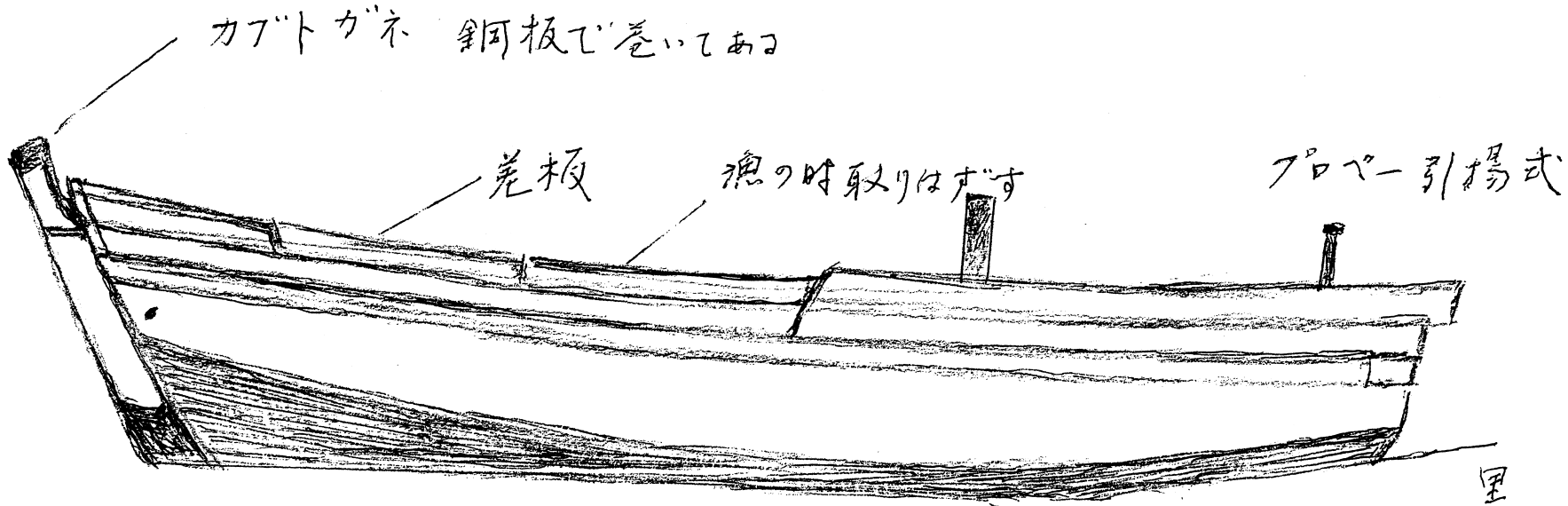
ケタ

檣材



ヤ帆

戦前のエンジン附漁船（五馬力）



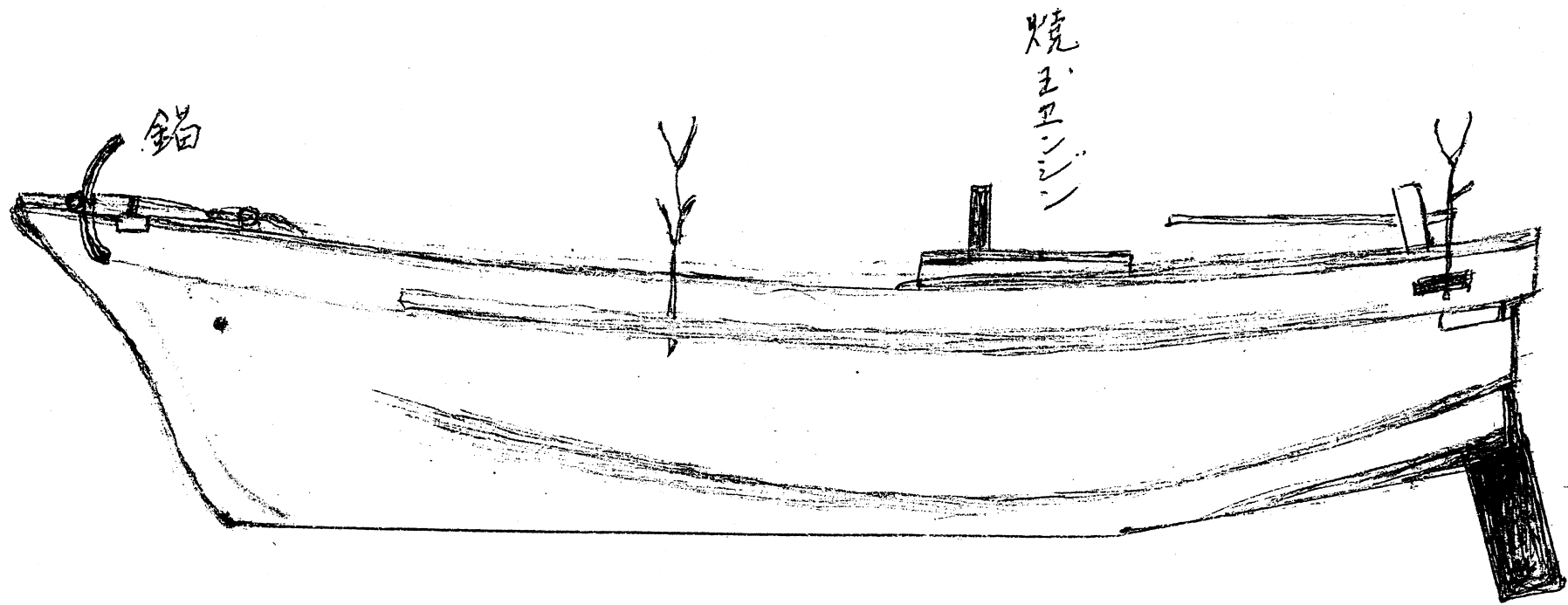
黒いエールを一月毎大瀬の白
一回船底を焼き塗り替をし
海岸の附着と舟虫の害を止
でいた

昭和初期エンジン附漁船とあ
らゆる漁業に使用していた

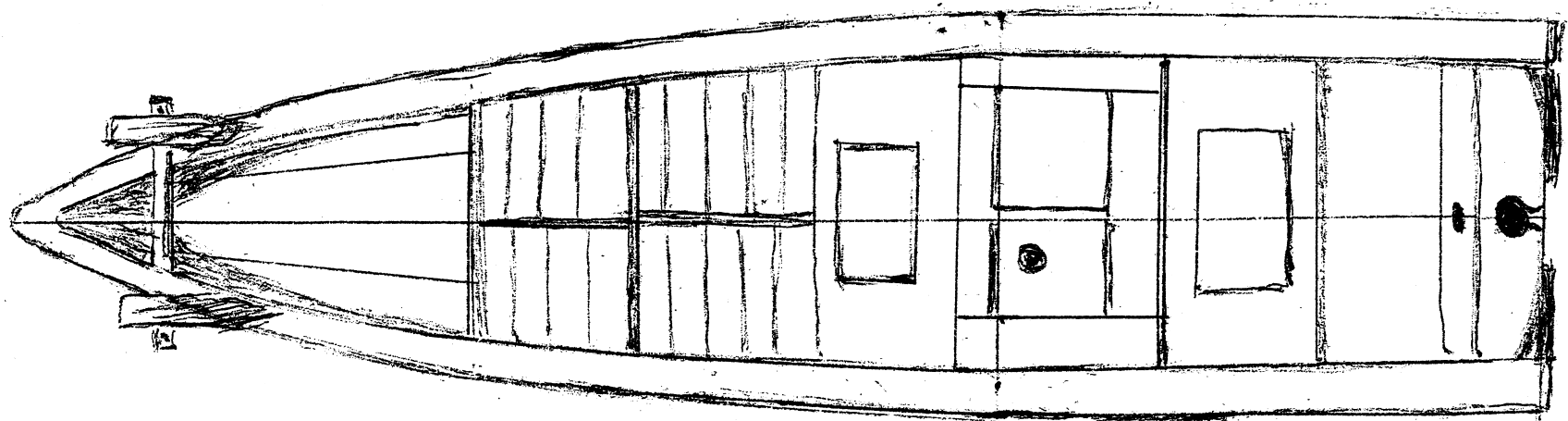
島の造船所が二ヶ所あり
島内で各自希望する設
計、船下建造していた

材質は杉檜一部松等であ
る

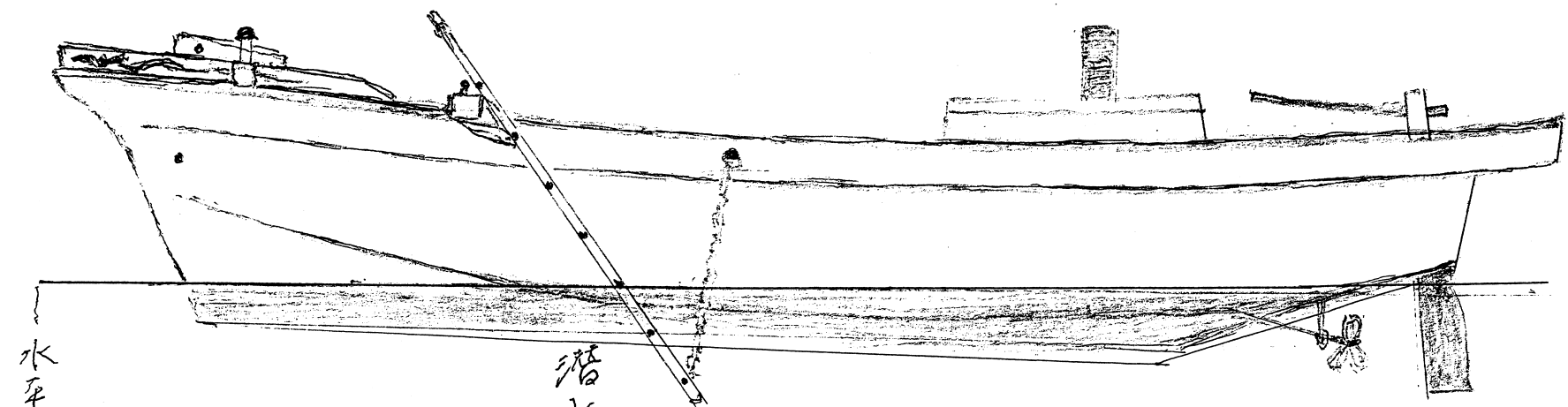
間取り録り表がない



昭和後の漁船

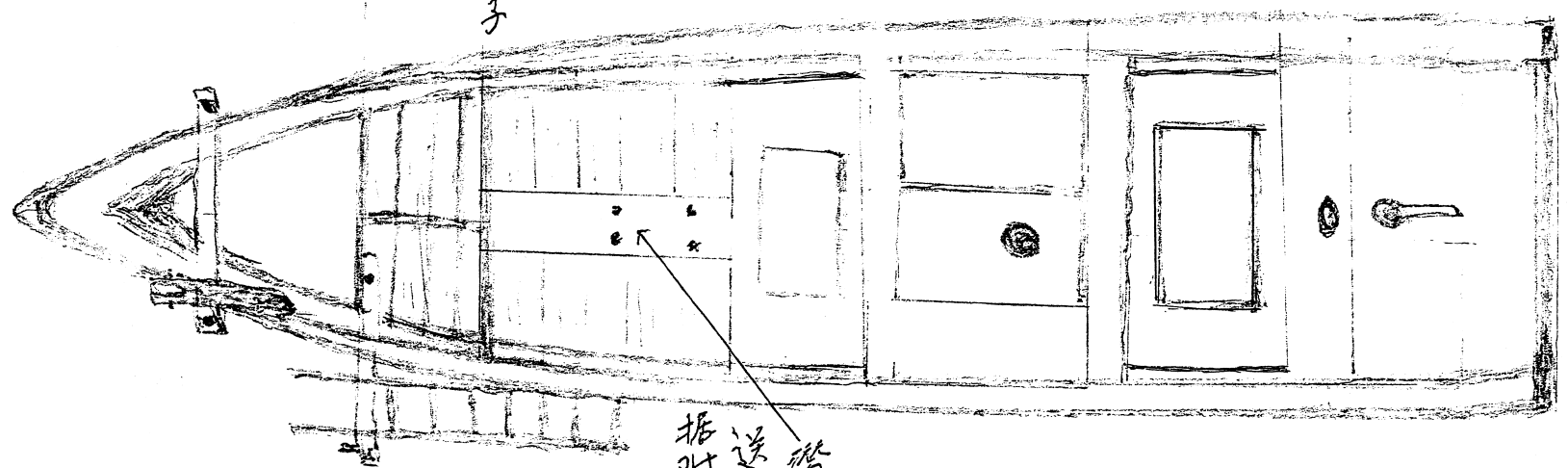


戦後の生孔は戦後型潜水士作業用と漁船（海上用）に
 使用され、船材質、日向杉と松



水平線

潜水士用梯子



潜水士用
 送気ホコ
 据附台